

ドラミング・スタイル分析

# デイヴ・タフ物語

~The SWINGIN' TOUGH GUY Story~



2019年12月02日

リズム教育研究所 研究生

岩崎 瞬 (Shun Iwasaki)

## はじめに

デイヴ・タフ (Dave Tough) というドラマーは、ひたすら曲の伴奏に徹し、ドラム・ソロは滅多にやらない。彼の演奏を聴いていると、いつの間にか気分が良くなり、自然と体が動き出す。心か体のどちらか一方だけでも、人を動かす演奏というのはなかなか出来るものではない。それにもかかわらず、彼は同時に両方とも動かしてしまうのだ。まさしく彼は、稀有な存在である。

このレポートでは、タフの人となりや演奏についてまとめた。音楽に寄り添うことの大切さを再認識させてくれる彼のような人物は、いつの時代にも必要だ。



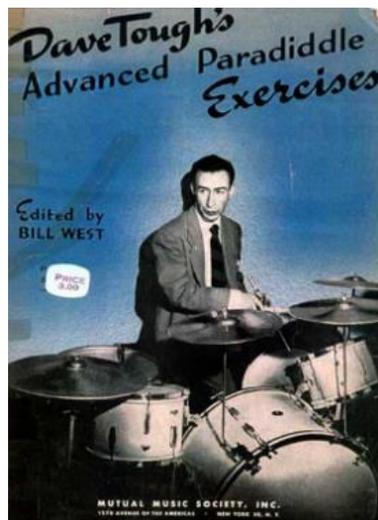
*© [drummerworld.com](http://drummerworld.com)*

## タフ・プロフィール

1907年<sup>①</sup>4月26日、イリノイ州オークパーク生まれ。本名デイヴィッド・ジャーヴィス・タフ(David Jarvis Tough)。両親はスコットランド生まれで、兄が2人、姉が1人いる。1916年、9歳の時に母親を亡くす。父親は21年に母親の姉妹と再婚するが、タフは彼女を“おばさん”と呼び続けた。

幼少時代からドラムに“打ち込み”、10代の頃は『オースティン・ハイ・スクール・ギャング(Austin High School Gang)』<sup>②</sup>の一員として活動。この頃から彼は一目置かれる存在で、バンド内でも重要な地位を確立していた。

音楽以外にも文学を愛し、自身も作家になりたいと熱望していた。この思いは、音楽雑誌『Metronome』に、彼のコラムが掲載されたことによって成し遂げられた。また、『Advanced Paradiddle Exercises』という教則本も執筆した(現在絶版)。



【教則本の表紙】

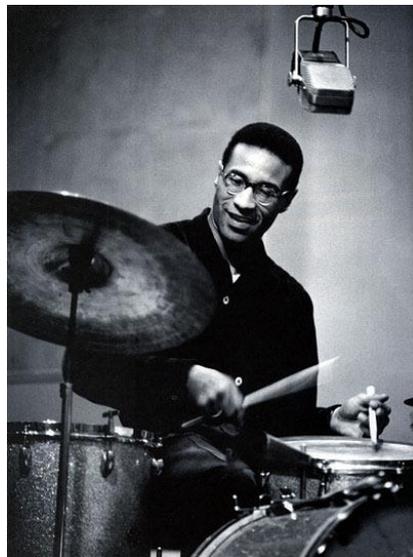
2度結婚している。最初は1927年に結婚し、36年に離婚。その後、44年に黒人のダンサーと再婚した。この頃という、人種差別が当たり前のように行われていた時代である。そのため、世間の風当たりは強かったと考えられるが、タフ夫妻は自分達の想いを貫き通した。

① 『1908年』とする資料も見受けられた。

② 黒人ジャズ・ミュージシャンから多大な影響を受けた、駆け出しの白人ジャズ・ミュージシャン達によるバンド。1920年代に人気を博し、シカゴ・ジャズを形成した。

タフは所属先を転々としたのだが、これには大きく分けて 2 つ理由がある。まず、彼が職人気質だったため。商業的で個性の無い音楽をひどく嫌い、音楽には完全性を求めた。こうした姿勢を受け入れてくれるメンバーは、リーダーだけであった。次に、彼が極度のアルコール中毒だったため。特に、1932 年から 35 年にかけては、療養に専念したことにより演奏が出来なかった<sup>③</sup>。一説によると、持病の癲癇（てんかん）の発作を抑えるために飲酒を勧められたのが<sup>④</sup>、酒に浸るきっかけとなったそうだ。

晩年、ビバップ・ドラミングについてきかれたタフは、「(ビバップのために) 今さら機材を変えることは出来ないし、周りのドラマーみたいに演奏することも出来ないよ。」と答えた。しかし、新しいもの好きな彼は、当時の若手ドラマーの演奏を欠かさず聴いていた。なかでも、マックス・ローチ(Max Roach)が彼のお気に入りだった。



© [drummerworld.com](http://drummerworld.com)

【気に入られたマックス・ローチ】

1948 年 12 月 9 日、ニュージャージー州ニューアークにて、デイヴ・タフは 41 歳でこの世を去った。帰宅途中に道から転落し、頭蓋骨を骨折したことが死に繋がった。転落した原因については明らかになっていないようだが<sup>⑤</sup>、時間帯は日没頃で、視界が悪かったそうだ。発見されてから 3 日間身元不明だったが、最終的に妻のおかげで判明した。

③ タフは煙草も吸っていたらしく、療養は一筋縄ではいかなかったと思われる。

④ 1920～30 年代、てんかんへの理解は十分に進んでおらず、発作の原因には精神面が大きく関わっているとされていた。「酔って気を紛らわせるのが良いでしょう。」といった“アドバイス”を受けたのかもしれない。

⑤ 足を滑らせた、躓いた、酔っていた、てんかんの発作が起きた等、資料によって様々な記述がなされていた。

## タフ・ドラミング

タフが活着ている間に、ジャズの主な演奏形態は〈ディキシーランド → スウィング → ビバップ (モダン・ジャズ)〉と変化していった。彼は 1920 年代に活動を開始し、30 年代後半から 40 年代半ばにかけて活躍した。演奏形態でいえば、ディキシーランドの時代に活動を開始し、スウィングの全盛期が彼の全盛期でもあった。

タフの演奏スタイルは、ベイビー・ドッズ(Baby Dodds)<sup>⑥</sup>からの影響が非常に大きいと言われている。確かに彼の演奏 (特に 1940 年代初頭までのもの) は、ディキシーランドとスウィングの中間的なものに聞こえる。ドラマーとしての彼を表す場合、“スウィングしたディキシーランド・ドラマー” というのが適切だと思う。



© [drummerworld.com](http://drummerworld.com)

【ベイビー・ドッズ】

1920 年代の演奏は、まだスウィングとは無縁のディキシーランド・ドラミングだ。それでもタフは、29 年、ホルネット奏者レッド・ニコルズ(Red Nichols)<sup>⑦</sup>率いる『ルイジアナ・リズム・キングス (Louisiana Rhythm Kings)』における演奏で、早くも時代の先を行った。彼はバスドラムを、タイムキープだけでなくフィル・インにも用いたのだ。拍のオモテで一定に踏み続けるのではなく、音に強弱をつけ、拍のウラにも入れて曲を彩った。もしかすると彼は、バスドラムのアプローチに関して、(自身は演奏しなかった) ビバップに影響を与えたのかもしれない。

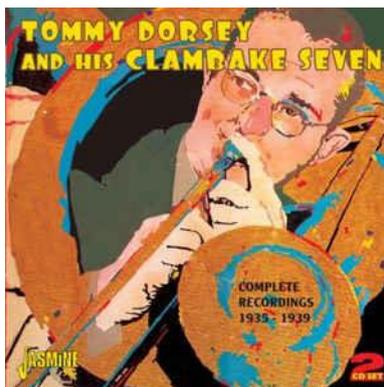
⑥ ウォーレン・“ベイビー”・ドッズ (Warren “Baby” Dodds)。ジャズ黎明期に活躍した、偉大なるドラマーのひとり。

⑦ ニコルズの半生を描いた映画『5つの銅貨』(1959 年公開) に、タフが登場する。彼を演じるのは、アメリカ西海岸の名ドラマー、シェリー・マン (Shelly Manne) だ。ちなみに、マンは雑誌のインタビューで、多大な影響を受けたドラマーとしてパパ・ジョー・ジョーンズ (Papa Jo Jones) とタフを挙げている。

(Modern Drummer Magazine - January, 1985 『Shelly Manne - The Last Interview』)

1936年から37年にかけては、トロンボーン奏者トミー・ドーシー (Tommy Dorsey) 率いる『トミー・ドーシー・アンド・ヒズ・クランベイク・セブン (Tommy Dorsey And His Clambake Seven)』で活動した。この頃は、タフの多彩なアプローチが一際輝いている。1曲の中だけでも、クローズド・ロールやリム・ショットでディキシランドの雰囲気を出したり、ハイハットでスウィングしたりする。ハイハットで演奏する時は、カップも叩いて3連符を取り入れている。また、曲を盛り上げる時には、スプラッシュ・シンバルを入れたりチャイナ・シンバルで畳み掛けたりして、一気にバンドを“鼓舞”する。さらに、この頃から彼のブラシによる演奏が聴ける。元々彼の演奏は、拍の真ん中を捉えていてもレイド・バックしているように聞こえる<sup>⑧</sup>。それがブラシとなると、より明確にそう聞こえるのだ。一般的にみても、スティックとブラシを持ち替えれば、曲の雰囲気は大きく変わる。しかし、彼の中には“理屈ではない何か”が存在する。譜面上に書き表せない“繊細で感覚的な部分”が、聴き手や共演者を魅了するようだ。

#### おすすめ音源 1 : Tommy Dorsey And His Clambake Seven



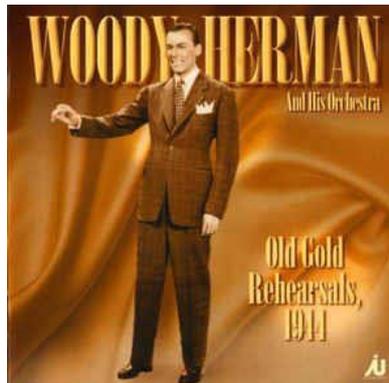
#### 『Complete Recordings 1935-1939』

タフは全48曲中26曲に参加 (CD2枚組)。自由で楽しそうな雰囲気、親しみやすい音楽が流れてくる。リム・ショットとシンバルを巧みに使い分ける『Twilight In Turkey』『Nice Work If You Can Get It』、ブラシで堅実に奏でる『He's A Gypsy From Poughkeepsie』『After You』、軽快にメンバーを紹介していく『Posin'』、見事なハイハットさばきの『All You Want To Is Dance』『Stardust On The Moon』『The Lady Is A Tramp』、攻撃的な一面が出た『If The Man In The Moon Were A Coon』など、個性豊かな楽曲が収録されている。

<sup>⑧</sup> ドラマー、エド・ショーネシー (Ed Shaughnessy) のコメントより。また、ショーネシーは、「彼はラウンド・チップの重たいスティックを使っていた。彼のタイム感はとても幅広く、まるでエルヴィン・ジョーンズ (Elvin Jones) のようだった。」とも述べている。

タフが最も脚光を浴びたのは、1944年から45年にかけて、クラリネット奏者ウディ・ハーマン (Woody Herman) ⑨率いる『ウディ・ハーマン・アンド・ザ・ファースト・ハード (Woody Herman And The First Herd)』に所属していた頃だ。バンドの一体感や曲の迫力は目を見張るものがあり、世間の評価が高いのも頷ける。一方で、彼のアプローチは以前ほど多彩ではなくなったように感じる (ブラシでの演奏を除く)。この点については、職人気質な彼の性格から察するに、彼の多彩さは後退してしまっただけではなく、彼が意図的に後退させたと考えられる。仕方のないことだが、ビッグ・バンドに加入した以上、演奏上の指示はスモール・バンドの時よりも増える。また、指示が無いからといってアプローチを変え過ぎると、曲の進行が分かりづらくなり、メンバーからは嫌がられるだろう。彼はドラマーとして (ミュージシャンとして) やるべきことをやっただけだ。それでも、“当たり前前のことが当たり前出来る” タフには、自ずと頭が下がる。

### おすすめ音源 2 : Woody Herman And His Orchestra



『Old Gold Rehearsals, 1944』

タフは 24 曲すべてに参加。彼の演奏は、バンドを“支えている”というより、“導いている”感じがする。チャイナ・シンバルが響きわたる『Red Top』『Apple Honey』、タムを自在に操る『The Golden Wedding』、ブラシで魅せる『Somebody Loves Me』『There Is No Greater Love』『1-2-3-4 Jump』、ハイハットが心地良い『125th Street Prophet』『T'ain't Me』など、聴きどころが満載だ。

ウディ・ハーマン楽団在籍時の音源は比較的多く残されているので、おそらくこの頃のものが一番入手しやすいだろう (その他の音源については 10 ページ目を参照)。

⑨ タフは、クラリネット (奏者) と相性が良かったのかもしれない。というのも、38年と41年にはベニー・グッドマン (Benny Goodman)、41年から42年にかけてはアーティ・ショウ (Artie Shaw) の楽団に身を置いていたからだ。

## おわりに…タフを偲んで

最後は、ミュージシャン達が残した（遺した）タフへの賛辞をいくつか紹介する。彼が活躍した期間は、決して長くない。それでも、数多くのミュージシャンが彼を称賛している。デイヴ・タフは、記録にも記憶にも残り続ける人物だ。

「彼にはとても力強いエネルギーが備わっていたから、聴いていた人は、体重 400 ポンド（約 181.437kg）の男が演奏しているぞ、って思ったかもしれないね。」

バディ・リッチ (Buddy Rich, 1917-1987)

「彼の後任として、僕はウディ・ハーマン楽団に入った。実は、最初の 2、3 週間は彼のドラムセットで演奏してね。彼のシンバルとチューニングの方法が大好きだったよ。（バスドラムの）打面の内側を横切るようにして、1 本のフェルト製のストラップが、何百切れもの粘着テープで貼り付けてあった。彼はテープ“おたく”だったのかな。前面には何もしていなかったよ。あれは物凄く良い音だった。彼は音感が良かったのさ。」

ドン・ラモンド (Don Lamond, 1920-2003)

「タフはテクニックを全く持ち合わせていなかったのに、ブラシもスティックも使いこなしていた。それに、彼の打ち出すシンバルの音色は、唯一無二のものだったね。本当に謎だらけだよ。」

ルイ・ベルソン (Louie Bellson, 1924-2009)

「デイヴ・タフについて 1 つ言いたいのは、彼は常に自分を見失わなかったってことさ、ちょうどバディ・リッチと同じようにね。タフは、自分達にはそれぞれ適性があると気づいた。大切なのは、自分が“目覚める”ことができる音楽環境に身を置くことだよ。タフの場合、それがウディ・ハーマン楽団だったというわけだ。」

メル・ルイス (Mel Lewis, 1929-1990)

「マックス・ローチ以前のドラマーなら、デイヴ・タフが真っ先に思い浮かぶ。彼は一歩も二歩も先を行っていたよ。創造的な精神から生み出された演奏の数々が、僕達が今日聞いているものより、昔のものだなんてね。」

エルヴィン・ジョーンズ (Elvin Jones, 1927-2004)

「この業界において、最も想像力豊かなドラマーさ。どんな 1 打であっても、彼は音楽的に叩いてみせた。彼が床を叩けば、それはもう音楽になっていたよ。」

ライオネル・ハンプトン (Lionel Hampton, 1908-2002)

「デイヴ・タフ、おそらく最も過小評価されているドラマー... 彼は、音楽を深く理解したうえで演奏していたね。」

アーティ・ショウ (Artie Shaw, 1910-2004)

「偉大なるリズム・プレイヤーよ！最少の“手数”と、絶妙にして強力なタイム感で、デイヴはうなりを上げるバンドを奮い立たせた。それに彼は、たぶん最も穏やかで心優しくカッコいいジャズ狂のひとりだったね、みんなが求めているような人物じゃないかな。」

ウディ・ハーマン (Woody Herman, 1913-1987)

「デイヴは、一度たりとも邪魔をしなかった。つまり、決して過剰な演奏はやらなかった。今の僕達には、もう少しデイヴ・タフみたいなドラマーが必要だね。」

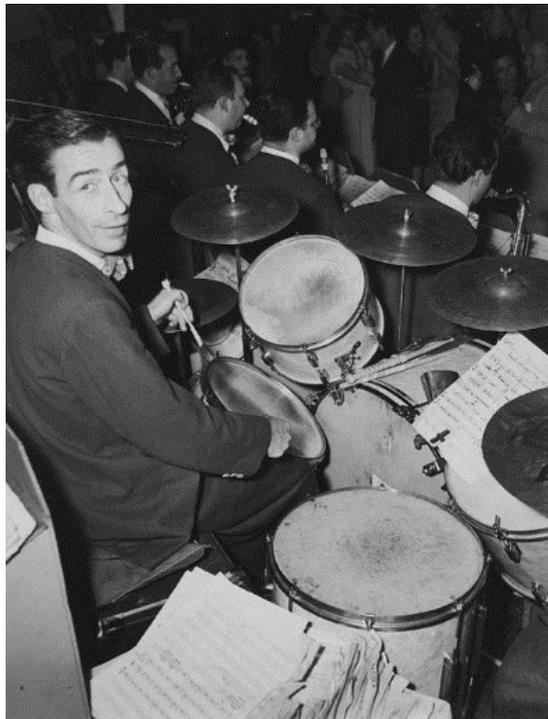
ディジー・ガレスピー (Dizzy Gillespie, 1917-1993)

「デイヴ・タフは、まるで何もしていないかのようにだった。でも、そこに強く惹かれたよ。」

アート・ファーマー (Art Farmer, 1928-1999)

「デイヴ・タフを忘れるなんて、とんでもないことさ。タフはまるで、時計みたいなドラマーだった。彼がバンドにピタッとはまったなら、みんなはもう演奏するしかなかったね。」

ベイビー・ドッズ (Baby Dodds, 1898-1959)



## 参考資料

### 〈文献〉

●Modern Drummer Magazine

『*From The Past - Profile Of A Legend: Dave Tough*』 (January-February, 1979)

『*The Drummers Of Woody Herman*』 (January, 1987)

『*Dave Tough: Different - And In Demand*』 (July, 2010)

●Burt Korall

『*Drummin' Men: The Heartbeat of Jazz - The Swing Years*』

(Oxford University Press)

●Chet Falzerano

『*Gretsch Drums: The Legacy of That Great Gretsch Sound*』

(Centerstream Publications)

●Danny Gottlieb

『*The Evolution of Jazz Drumming*』 (Hudson Music)

●Dave Tough Productions (<https://www.davetough.com/uncledave/>)

※タフの甥にあたる人物のサイト。彼もまた、音楽の世界で活躍しているようだ。

●Jazz Profiles (<https://jazzprofiles.blogspot.com/2009/05/davy-tough-1908-1948.html>)

●Eddie Metz And His Gang

『*Tough Assignment - A Tribute To Davie Tough*』

(Nagel Heyer Records – Nagel-Heyer CD 053)

※タフへのトリビュート・アルバム。ライナーノーツが彼についてまとめられているため、音源ではなく文献に含めた。

### 〈画像〉

●Drummerworld ([https://www.drummerworld.com/drummers/Dave\\_Tough.html](https://www.drummerworld.com/drummers/Dave_Tough.html))

●Discogs (<https://www.discogs.com/>)

## 〈音源〉

アーティスト名は、タフの演奏が古いものから順番に表記した。

●Louisiana Rhythm Kings

『*Recorded in New York, 1929-1930*』 (Jazz Oracle - BDW 8024)

●Mound City Blue Blowers

『*1935-1936*』 (Classics - CLASSICS 895)

●Tommy Dorsey And His Clambake Seven

『*Complete Recordings 1935-1939*』 (Jasmine Records - JASCD 539)

●Benny Goodman

『*1938 Vol. 2*』 (Classics - CLASSICS 961)

●Bud Freeman

『*1939-1940*』 (Classics - CLASSICS 811)

●Jack Teagarden

『*Jack Teagarden's Big Eight! / Pee Wee Russell's Rhythmakers*』  
(Original Jazz Classics – OJCCD-1708-2, Riverside Records – RLP-141)

●Charlie Christian

『*The Charlie Christian Collection 1939-41*』 (Fabulous - FABCD352)

●Artie Shaw

『*Evensong*』 (Hep Records - HEP CD 1073)

●Woody Herman (“And The First Herd” もしくは “And His Orchestra”)

『*Vol. 1: Live in 1944 Woodchopper's Ball*』 (Jass Records – J-CD-621)

『*Vol. 2: Live in 1945 Northwest Passage*』 (Jass Records – J-CD-625)

『*The V Disc Years • Volumes 1 & 2 • 1944~46*』 (Hep Records - HEP CD 2/3435)

『*Old Gold Rehearsals, 1944*』 (Jazz Unlimited - 201 2079)

『*The 3 Herds*』 (Poll Winners Records - 27275)

●Charlie Ventura & Bill Harris

『*Live At The Three Deuces Vol. 1 & 2*』

(HighNote Records, Inc. - HCD 7066 & HCD 7082)

〈映像〉

●『*Legends of Jazz Drumming, Complete*』 Hosted by Louie Bellson

(Alfred Publishing Co., Inc.)



[© drummerworld.com](http://drummerworld.com)